

バリアをつくりだす

福原悠介 映像作家（『飯館村に帰る』制作）

バリアはコミュニケーションがなければ生まれません。段差がバリアになるのはそれを越えてどこかへ行こうとするからだし、声の出ないことは、そもそも誰とも話そうとしなければバリアとは言えないでしょう。コミュニケーションがなければバリアもない。だからバリアは、コミュニケーションとともにある「影」のようなものではないでしょうか。

映画の上映もまた「コミュニケーション」です。誰かに見せようとするからこそ、言語の違いや視聴覚の障害がバリアになるのであって、誰にも見せない映画には、字幕も音声解説も必要ありません。上映しなければバリアもありませんが、かといってそれが「バリアフリー」なのかと言うと……やはりちょっと違うと思います。

だから「バリアフリー」とは、「バリアがない」という意味ではないでしょう。それは、伝えたいけど伝わらない、やりたいけどできないことを、どうすれば別の仕方で乗り越えていけるのかを考え実行していく一連の「プロセス」を指す言葉であって、そのうえで実際にコミュニケーションが可能になることは、あくまでも「バリアフリー」の「結果」です。

『飯館村に帰る』は、今までのバリアフリー上映のような商業映画やフィクションではなく、自主制作のドキュメンタリー作品です。娯楽作でもないし、わかりやすいストーリーやメッセージもありませんので、ボランティアのみなさんの作業も今まで以上に大変なものだったと思います。

日本語字幕は、語られる生（なま）の方言のニュアンスをどうやれば表現できるのか、音声解説は、限られた時間で村の風景をどのように伝えるのか。今までのやり方がそのまま適用できないことは、同時に「伝えること」の根本に立ち返って「わたしが見ているこの映像とはなにか？」を問い直す機会でもあります。僕は、この試行錯誤の「プロセス」こそ、『飯館村に帰る』のような市民の記録を、バリアフリー上映でやることの大きな意義なのではないかと感じました。

今回ボランティアのみなさんの制作を見ていて、「バリアフリー」という観点から重要なのは、映画にどんな字幕や解説が加わったのかという「結果」だけでなく、企画・制作・上映にいたるまでの「プロセス」全体なのだ気づかされました。

コミュニケーションをとろうとすること、バリアとはなにか考えること、どうすればそれが伝わるのか試行錯誤すること。「コミュニケーションがなければバリアもない」のであれば、「バリアフリー」とは「バリアをなくす」ことではなくて、むしろ「つくりだす」ことなのかもしれません。